

悪かれたように中国熱に浮かされた日本の財界人が、何を狙い何を求めての相次ぐ訪中か、中国側ではすべてお見透しであろうか。九月五日の朝日新聞朝刊をみると三菱訪中団の中国側との話し合いの中で、①貿易は弾力的に拡大するが中国は大量消費国としての商品市場にならない。②中国は資源供給国とならないし資源の収奪を許さない。③中国は外国資本の投資は許さないし中国自身も外国に資本進出しない。④貿易決済は通常の国際的慣習に従うが特に恩恵的な決済条件は受けない。などの考えを強調したと報じている。

これは一言につくと、中国は資本主義的な搾取も侵略も許さない。中国はこの国とも対等に通商貿易はするが、再び資本主義列国の餌食にはならないぞ、と警告したものであろう。少なくとも日本財界人はそう受取って自粛自戒すべきであらう。これは何も中国に限った問題ではなく、東南アジアでも、アフリカでも同じことであり、現に日本の資本主義的侵略や搾取に激しい憎悪の眼を向けはじめている国も少なくない。

いのである。

今の日本の資本主義的経済性格そのものが不労所得中心経済であり、生産手段そのものが利潤追求本位であり、そして対立葛藤奪い合いに終始し他人を犠牲に己れの利を漁り、不労所得が尊重され、汗の労働が軽視され、倫理観から逸脱した思惑や僥倖や不当利得が大巾をきかせ、ついに金力が権力と結んで大衆を踏み台にして利己的繁殖を競うという、歪められた不平等社会を生じており、人間性喪失の驚くべき邪道日本となつていなのだ。今の中国が警戒するのも当然であらう。

巻頭言

手塚信吉

どこの国でも自国産業を脅すダンピング市場化を許したり、資源の収奪を容認するはずがない。搾取と不労所得を根本性格とする今の日本の資本主義経済そのものを改

めない限り、アメリカでもEC各国でも厳しい警戒心をゆるめないであらう。加工貿易国として立たざるを得ない日本の宿命を正しく世界に理解させるためにも、野放しの資本主義自由経済など許せる国柄でないことを反省し自戒する中のみ日中国交正常化も日中貿易の活路もある。

保守党内には日中国交正常化尚早論者が百名以上もあると云うが、時代感覚のずれから見る日本は確かに時期尚早である。そのずれが支障となる恐れも多分にあるであらう。人間平等観と労働の尊厳、これを二本の柱として、世界の秩序は大きく変わりつつあることを理解する日本人は少ない。搾取と不労所得を生産活動の中に温存せしめて、働く階級の犠牲の上に、不平等社会秩序を維持せんとする日本の社会秩序の行方をどう打開するか。

戦後の日本は科学文化の上では急発展を遂げているが、精神文化の上では退歩どころか総破綻の惨状を呈している。日中国交の接点に於て新旧秩序の交流こそ日本の一大試金石となるであらう。

イスラエル国にキブツがある

手塚信吉

一、イスラエルを理解せずにキブツへ行くな

今から十年前キブツ思想普及の講演会の席上で、聴衆の中から「ユダヤ人ノ」などと罵倒の声を時々耳にした。そんな時は、「キリスト様はユダヤ人であるが、ユダヤ人嫌いの欧米人の大半がキリスト教の信徒である。またお釈迦様は印度北部の釈迦族という小民族の生れであったが、その仏教の教えは東亜の全域に及び、特に日本に渡来して、ケンランたる仏教文化の花を開いている。いつの時代でもその優れた思想文化に国境も民族的偏見もない。キブツは確かにユダヤ民族の創造したものであるが、人間社会の新しい生活原理として、広く世界に普及する価値があると思うから国家や民族を越えてキブツを讀んでいるのです」と答えていた。実は私もキブツを知るまではイスラエル共和国などその存在もかすかであった。一九六三年十月一日発行の拙著「新しい農業キブツ」の冒頭に左のような文章がある。

「今次の世界大戦終了後に雨後の筈のように続出した新興民族国家のなかで、中東の一角パレスチナの地に謎の国イスラエル共和国が

誕生したときは、また厄介な国際紛争の火種が一つ増えたなあ、ぐらいに思っていた。そしてキブツという世界人類を動かすような新しい火種が発生していることは全く知らなかった。日本では日独伊三国同盟の関係もあつて戦時中、四王中将という強そうな名の將軍などが先頭になつて、さかんにユダヤ禍を宣伝し、ユダヤ人は何処の国でも平気でスパイをやる。彼等にはフリーメーソンという秘密結社があつて常に世界攪乱を企て、戦争を誘発して、裏面から大金儲けを平気でやる云々、と一々ユダヤ財閥の名を並べて非難していた。こんな講演を何回もきかされると、大抵の日本人は「ベニスの商人」などを思い出して無批判にユダヤ嫌いになつている。実は筆者もその一人にすぎなかった。」

それに日本は日独伊三国同盟後、国策として親独宣伝を煽り立て、ナチ党のユダヤ人虐殺事件なども、あまり新聞雑誌にも報道されず、偶々ユダヤ人処刑事件などが新聞の片隅に書かれてあつても、反国家スパイ行為とか、内乱陰謀の罪とか処刑を正当化した報道のみであつた。

戦後まもなくである。「アンネの日記」が翻訳出版されて忽ちベストセラーになり、大評判になつたとき一読しても、実に容易に信

することができないで、心の奥でそんな馬鹿なことがあるはずがないと否定的であった。ところが、是非これを読めと友人がくれた杉田六一著『国際紛争の焦点イスラエル』という小冊子を注視して熟読すると私の心の動きが変わってきた。そしてユダヤ民族の国際的立場に同情し、再建イスラエルの誕生も理解できるようになった。そしてその小冊子の末尾に二頁ぐらい簡単に書いてあったキブツ協同農業の内容に異常なまでに感動したのである。それというのは、ちょうどその頃私は産業界の第一線から引退して農村問題の研究に没頭していたが、内情を知らなければ知るほど研究すればするほど日本の農業は末期症状を呈しており、単なる経済対策で打開できる段階ではない。全く新しい生活哲学を生み出すような精神革命を必要とする時期がきているであろうと考えていた矢先であったからである。

それからいろいろイスラエルに関する文献をあさるようになった。その中で小林正之訳のノーマン・ベンドウィッチ著『再建のイスラエル』にもキブツのことが数頁書いてあったが、人間社会に真の自由平等が生かされた協同社会、それがすばらしい業績となって各自が高い文化生活をいとなんでおり、キブツを視察に訪れた欧米人が非常な感銘をうけている。そのなかで「前イギリス政府農業実験所長ジョン・ラッセル卿は、キブツ開拓民たちは地力の維持活用に世界最長の手本を示し、集団農業の比類なき成果をあげている。」と報じており、またアメリカ合衆国元副大統領ウォーレス氏は「キブツは世界における最も驚嘆すべき事業であり精神を手でふれうる一個の現実へと転化せしめたものである。」と絶讃の言葉をおしませ述べている。

それをみて私は異常なまでに魅力を感じ、是非一度視察してみた

二、中東紛争の経緯

戦争というものは古今東西、何処の国でもいつの時代でも残酷で悲惨なものであり、相互に正当性を主張するので、第三者から軽々しく一方的な批判も当らない。だから私は今日まで中東紛争の問題をさげ、すべて文化交流の範囲としてのキブツを理解しキブツに傾倒してきた。しかしながらキブツ普及運動の先駆者として協会まで設立するには、イスラエルもキブツも研究できるだけ研究し、その良心を納得せしめてから出発したものである。

パレスチナ問題を歴史的に研究してゆくと際限もなく複雑であり、正当性の判断もみる人によりまちまちであるが、一九四七年十月国連総会に於て絶対多数決で、イスラエル国の独立が認められており、同時にアメリカもソ連も同時承認をして、其他の各国も相次いで承認しているのだから、その正当性を認めざるを得ないし、アラブ各国といえども世界の秩序を尊重して従うべきであるのに、真向から反対して力でイスラエル絶滅を企てた。

パレスチナ在住ユダヤ人は、国連の承認に基いて多年の宿望であった、新興国家イスラエル共和国を再建し独立宣言をしたのが一九四八年五月十五日であった。ところが周囲のアラブ国家群は、その国連の決定を無視して、ユダヤ人を一人残さず地中海のモクズにすると宣言して、その独立の翌日、南はエジプトから東はヨルダン・シリアから、北はレバノンと三方から十五万の大軍を以て攻めこんできた。独立宣言早々でありイスラエルには軍隊もなかったのでアラブ側の高言通りイスラエルの如きは三日で滅亡すると思っていた

いと考えていた。偶々一九六二年西欧各国の農業事情視察の帰途イスラエルに立寄り、その待望のキブツ協同社会を新旧大小七集団を視察して増々共鳴し、これこそ理想の人間社会として学ぶべき価値があると確信し、帰国早々日本キブツ協会を設けて、キブツ協同体思想の普及に努める一方、希望する青年男女をキブツ研修生として毎年現地に派遣するようになりその人員も三百余名になっている。

さてそうなるキブツを身近かに感ずるようになり、キブツを産み育ててきたユダヤ人に親近感を持ち、自他共に許す親イスラエル派になっていったが、キブツ研修生の国内研修などでは公正な立場を考えて、「キリストはユダヤ人であったが、ユダヤ嫌いの欧米人の大半がキリスト教徒である。どんな小国の思想文化でも学ぶべきものがあれば大いに教えを乞うべきである。即ちキブツの思想精神はその真価を認めて研修するのである。」こんな話をよくしたが、それを研修生の立場から大きくとユダヤ嫌いでキブツが好きならよいと誤解する恐れがある。

その為日本のキブツ研修生の中にはイスラエル嫌いのキブツ好き、アラブびいきのキブツ研修生も出てきたのである。親は憎いが子は可愛い、そんな矛盾の中からは決して共鳴も信頼感も生れない。キブツ思想や精神は心のふれ合いから体得するもので、学問のものではないから親イスラエルが第一のキブツ研修生資格条件ということになる。今回のロッド空港乱射事件に対する批判論などからその必要を痛感したので、今後はイスラエルに批判的な人はキブツ研修生として行くべきではない。また真にキブツの本質内容にふれた人の邪魔にもなるので遠慮して貰いたい。参考の為に中東紛争の内容について左記に略記することにした。

が至るところのキブツ部落が結束してよく防戦した。エジプト十万の大軍が押しよせ、ガザ地区周辺の三〇集団のキブツなどでは、十三才以上八十才までの老人まで、銃を持って必死の覚悟で防戦につとめ、多大の損害を蒙りながらも六週間を持ちこたえた。その内に後日首相となったベングリオンなどが中核となって、テルアビブで国防軍兵を募集し、武器弾薬を購入空輸し六、七千人の急造軍を以て大逆襲に出て、忽ちアラブ軍を撃退して終った。その他エルサレム周辺でも、北部ガリラヤ地方でも、キブツ集団の活躍は目覚ましく、今日でも各キブツ内に航空機の残がいや戦車の破損した敵軍の遺物が至るところに保存されている。

そしてアラブ連合軍は、はじめの暴言に反して惨敗し、国連の仲介斡旋により休戦協定成立、国境協定線は国連軍によつて保持されていた。戦争に難民はつきもの、この戦いでアラブ側から家も財産も捨ててイスラエル国に命からがら避難したユダヤ人の数は六十万人も八十万人ともいわれているが、これらの難民にはイスラエル政府は、家を与え職を与えて二十年後の今日、大半のものは中堅国民として健在している。

ところが当時パレスチナから作戦的にアラブ側が退避せしめた約六十万人のアラブ系住民は、家も与えず職も与えず、扶養もせず二十余年間、国連の救援食料に依存して、難民収容所であらぶら、ふらふら生存作用だけ行つて遊んでおり、その人口も増加する一方でありは百二十万人とも百五十万人ともいわれている。しかもそれらの難民に正当な世界秩序の常識を教えず、幼児のころからユダヤ攻撃の敵愾心だけ煽り立て、自国政府までが持て余している。それをまた国際勢力の争奪に利用する大國まで生じて、際限もない国際紛

争の火種となっている。あの一九四八年の戦争、イスラエルでは独立戦争といっている。冷静にイスラエルに居残ったアラブ人は約二十万人、ナザレ市の如きは人口三万八千人の内、アラブ人が二万五千人も住んでいるが、ユダヤ人と対等であり安定した生活であり、国会議員も数人出ている。

その後スエズ戦争があり、イスラエル国も英仏側について協力したが、それはイスラエルの船舶だけスエズ運河の通行を認めなかったエジプト側の責任であった。

世界の耳目を驚かせたダヤン將軍の電撃作戦で有名な、あの一九六七年六月五日に勃発した六日戦争もイスラエルが無理に起こした戦争ではない。たった六日間で本国の二倍に当る土地を占領して、地図までぬり替えているイスラエル国にも、日本国内ではかなり手きびしい批判もあるが、あの戦争の原因はアカバ湾封鎖というエジプト側が無暴にもスエズ運河の通行を許さないから、イスラエルではアカバ湾を利用してエーラット港を新設して唯一の出入口としていた。それを封鎖されることは、イスラエル国の息の根をとめるに等しい。そのことはナセル大統領自らが、その通り宣言していた。

イスラエルが生死をかけて立ち上ったのは当然であり、それ位のことにはナセルも百を承知であったが、ただ自国軍やソ連雇兵が弱過ぎたことがナセルの誤算であった。世界秩序の中心権威である国連総会の決定を無視して、無暴にもイスラエル国など三日間で皆滅しユダヤ人を一人残らず地中海の藻にするとか豪語してなぐり込んで惨敗した。そして性根りもなくアカバ湾の封鎖でユダヤ人の息の根を止めてやるぞと豪語して、やむなく立ち上ったイスラエルが僅か六日間で四万平方杆のシナイ半島を占領して終った。

史実から観察すると、頼朝は希代の大政治家であり、義経は機略に富んだ武将に過ぎない。両者を同時に談すべきではない。それと同じでイスラエルは新興小国ではあるが、最上位に属する文化国家であり、アラブ五カ国は独立国家体制さえ危い権力闘争常なる専制動揺国である。同一に談することが脱線のものである。今更テロ行為を洗い出すのも大気ないが、文献によって拾ってみても、アラブ人がユダヤ人を虐殺した例は左の通りである。

一九二一年五月、ヤツファア地区で十三名のユダヤ人が虐殺された。

一九二九年八月、ヘブロンとツファットでユダヤ教会堂のユダヤ居住区がアラブ人に襲われ一三三名のユダヤ人が殺害された。

尚この年に外に合計八〇人のユダヤ人が殺害されている。

一九三八年十月、チベリアスでユダヤ人一九名が虐殺された。

一九四七年十二月エチオンに行く途中のユダヤ人が待伏せされて九名虐殺された。同年は外にもベルシエバ市で五名、ロットで

一四名、ハイファアの整油工場ではユダヤ人労働者が襲われ三九名が殺された。

一九四八年一月ハイファアの中心部で虐殺事件が起りユダヤ人七名虐殺され三九名が重傷を負った。

一九四八年の四月、ハダツサ病院の車がスコープス山に行く途中に襲われて看護婦中心に三六名殺され、二〇名が重傷を負わされた。尚同年三月一三日エルサレムのユダヤ機関が襲われ一三名死亡、四〇名重傷を負った。

一九六八年三月、スクールバスが襲われて小学生二九名が重傷、医師外二名死去。

一九六八年十一月、マハネエフダマーケットでの虐殺事件には十

この中東戦争を公平にみてイスラエル側に罪はない。勝ったから助かったようなものだが、敗けていたら、ユダヤ人は一人残らず地中海のモクスにされていたであろう。六日戦争にしても、アカバ湾を封鎖されたら袋のネズミになってしまふ。そんな自滅を待つようでは独立国ではない。国連の決定に基いて独立し国連の調停に従って休戦中であるイスラエルが、その調停を破ったアラブに対して自衛手段を構するのは当然であろう。第三者の立場からアラブが敗けたから気の毒で同情し、イスラエルが勝ったから憎らしい論では世界の秩序は保てないであろう。

一九四八年国連が絶対多数でイスラエル共和国の独立を認めるまでには、賛否両論があつて容易ではなかった。しかし世界の世論が認めて決定した以上それに従うべきであつて武力による反逆など許されるべきではない。同じイギリスの委任統治領または保護国にすぎなかつたアラブ各国が国連の決定に反対しても筋が通らない。人類を世界戦争から救うためにも国連を重視し国連の裁決を尊重すべきである。パレスチナの地にイスラエル共和国の再建を認めたのは国連である。不平があるなら国連に訴えるべきであつて、ユダヤ人皆殺しを公言してイスラエルに戦争を仕かけたアラブこそ世界秩序の破壊者である。

アラブ側がユダヤ人の虐殺行為としてよくデルヤシン村を引合いに出し、日本のキブツ研修生の中にも、その宣伝に惑わされているものがあつたが、数え切れないほどあるアラブ人がユダヤ人を虐殺したテロ行為は一向に知らされていない。これは日本の新聞雑誌などにも責任があると思うが、元来日本人は昔から判官びいきの習性があつて敗犬に同情して公平を失う場合が少くない。

一名死亡、五五名重傷を負った。

一九六九年二月、エルサレムのスーパーマーケット、スーパーゾルでのテロ事件で二名死亡、九名重傷。

一九六九年三月、ヘブライ大学のカフェテリアでのテロ事件では二九名の学生が死傷。

一九六九年十月、アフラのマーケットのテロ事件で三名死亡、数十名重傷。

一九六九年十一月、エルアルの事務所襲撃事件では一名死亡、十三名重傷。

一九六九年一月、バグダット及びバスラではウ・タント国連事務総長、パウロ六世（ローマ法皇）のステートメントがあつたにも拘らず、ユダヤ人十四名が大衆の面前で絞殺の刑に処せられた（無実のスパイ容疑であつた）

こんな事件を挙げて行くと際限のないものであろうが、民族と民族の憎しみ合い、そのものをなんとか氷解したいものだ。月刊キブツ七月号に掲載した、「テロと非暴力をめぐる」と題した制作部座談会の内容が、俄然問題化し、私も最終責任者として、なんとも申訳のない監督不行届の段、心から恥じ入る次第であるが、制作部の若者たちも反イスラエルとか親アラブとかそんな意図のあつてのことではなく、全く不注意であつた事を反省し、今後を謹むことでお許し願いたい。

去る八日付と八月十五日付の奥村久雄氏の本件に関する抗議と私見をみて、現地にある世話係の立場として当然の抗議であり、正しい見解であると感じたので左記に掲載して公正の判断を讀者から求めます。

「月刊キブツ七月号の制作部座談会の記事がイスラエルの日本人入委員会でも、大きな問題となっているようです。M I君やR Y君の発言が日本では大きな問題でしょうが、こちらでは制作部の発言内容を重視しているようで、今日も委員会のメンバーが集って、そのことについて話合っているそうです。特にZ氏の発言にある「デルヤシン村は独立戦争時にイルグンによって全滅させられたという村だ、ああいうことがいくつも起つたらしい……と云う言葉。こんな重大な事を、らしいなどという言葉で片づけるなどはひきょうだ、という言葉まで出たそうです。たしかにデルヤシン村の事に關しては、イスラエル独立の過程で最も恥しい汚点であったとイスラエルの知識人ははじらいをもっています、そんなことがいくつもあつたという事はうそで、あの事件以外にはなかつたという切つています。それをいくつもあつたらしいなどと書かれたのでは、よほど頭にきたと見えます。その他多くの点で私には同調できないものがあります、いまそのことは書きませんが、ただ手塚さんの巻頭言と制作部座談会の間にはあまりにも大きな開きを感じられます。明後日ラマトヨハナンに行き、モシエに会って委員会での話をきいてみます。ではまた。」

「ラマトヨハナンで月刊キブツ七月号の制作部座談会の記事について、モシエ・ザミール氏と話合いました。話合いというよりも、モシエ氏の話、意見を聞かせてもらったという方が適当でしょう。モシエは勿論のこと、こちらの委員会の人達は、その事を重大視しています。キブツ研修生を送っている日本協同体協会の編集者達——研修生のリーダーである人達の発言であり記事であるだけに、これ

を重くみているという事です。あの中から反イスラエルの感じが感じられる。イスラエル側にもアラブ側にもたまたま中立の立場だというだろうが、国を持つユダヤ人と国を持たないパレスチナ人……という表現は読者に非常に片寄った受取り方をされる。

Z氏が基本的にイスラエルの国家は存在すべきだという意識はほくの中にある、といっている事に対しては「トグラバ」といおう、しかしデルヤシン村のことを引き合いに出してああいうことがいくつも起つたらしい「らしい」とは一体なんだ、そういう重大なことに關しては、そういう事があつたならあつた、なかつたならなかつたで、はつきりすべき事で、ああいうことがいくつも起つたらしいという表現は、聞く人にはユダヤ人はそういう残虐な行為をいくつもしたんだ、と受けとられる。あれは戦争の時ユダヤ人のうちのイルグンという過激な一派が起した残虐な、そして我々ユダヤ人としても本心に恥しい事だと思つていふことだ。その時イスラエルでは直ちに、そのような事をしてはならない事を立法化し、きびしく取締っている。ゲリラ側は今度の行為を英雄的な行為として賞讃している。「個人的な見解としてはそれに対して怒りを表明することが重要だと思えるんだ」とゲリラ側を批判しているが、そのあとにデルヤシン村の事を持つてきて、ユダヤ人がアラブ人に圧倒的な被害を与えている、そしてユダヤ人は罪のないアラブ人を殺して来た、という言い方は、あまりにも片寄った表現である。デルヤシン村の事は、ユダヤ人が独立戦争の時に行つた、恥しい遺憾な行為だが、戦時下ではアラブ人だけでなくユダヤ人も殺されている。またヨロップでユダヤ人がたくさん殺されたがパレスチナに限つてみた場合……云々に対してはヨロップで殺されたユダヤ人はアラブとの

関係で殺されたものでなく、ユダヤ人であるという理由のみで殺された。それをこいう形で対比させ例にあげてくることもおかしい。

またX氏の事件処理にあつて日本政府がとつた態度行為に対し「実におせっかいだ」という批判に対しても、確かに日本政府は自分達イスラエル側でも、驚くほどの責任感のある所を示した。X氏はとにかく反政府的な考え方に立っている人だし、私もその事は知っている。私はユダヤ人であり、ユダヤ人のだれかが何かよくない事をした事によつて、しかも今度のロッド空港の三人のようにごくわずかのユダヤ人の行為行動のためにユダヤ人全体が弾圧しつづけられてきたし、今でもユダヤ人のだれかが、ロッド空港での虐殺事件のような事をすれば、ユダヤ人として恥しい事だという気持が自分の中に起るだろう。これは世界中で弾圧しつづけられてきた民族と、そうでない人との受けとめ方の違いかもしれないが……云々と長時間にわたつてモシエ氏の見解を聞かせてもらった。要するにロッド空港事件に対して世界のほとんどの新聞、ラジオ、テレビ等々がきびしく非難している。ヨルダンのフセインにしても、あの行為を非難しているのに、こともあろうにジャパン・キブツ・アソシエーションのエディター達が表現の底にロッド空港事件を擁護するよ

うな匂いをただよわせているように感じられる。またそれらの人々はモシエ氏にとっては親しい人々だと思つているのに、イスラエルの人々から「お前がつながりを持つて一生懸命になつて日本人達の代表のいつていることをみよ」と言われた時、一言も答えようがない、と悲しい顔をしておりました。」

「私は再度あの記事を読み返してみました。その感想をもう少し書いてみます。まずX氏のロッド空港事件の処理にあつて政府がと

つた行為を實におせっかいだと批判していることに對し、これは政府が謝罪した事を全面的に否定した表現と受取つています。ああいう時政府は謝罪も何もせず黙しておればいいとでも言うのでしようか。巻頭言で手塚さんは「嗚呼全人類の敵、残虐殺人青年を出した日本の大人達こそ重大責任がある……」と言つておられる。そして早速イスラエル大使館に馳せつけて、大使や参事官に面会され、陳謝された事に対しても、それはよけいなことだという事になりはしないでしょうか。私はあの事件の起つた時、あの事を聞いた時、ああいう青年を生み出した日本の社会、日本の教育、指導者のあり方を考えたし、まずそのことを日本人として大反省しなければならぬと思つた。本心に恥しい事だと思つた。バスの中で日本人なるが故に冷たいまなざしで見られたあの時の感じは、いまでも思い出せばはつきりとよみがえつてくる。日本政府が陳謝の意を表明し、在イスラエル日本大使がテレビを通じて陳謝された事によりイスラエル人の対日本人感情はやわらいて来た。今でも町を歩いていて日本人なるが故に、子供達に「オカモトコウゾウ」とのしられ、石を投げられた研修生もいる。日本政府がとつた態度があまりにも、イスラエルに対して友好的でアラブ側では反感を買ふ恐れがあるという新聞記事を読んだ事もあるが、もし日本政府が、あの事件に對し他国の出来事として責任はないなどという態度をとつておれば、アラブゲリラ側ならいざ知らず、全世界の常識人から冷たい日本人種として見られ、全世界からますますしめ出されて行くのではないか。やはり現体制のもとでは、政府には日本人の為すことに對しては、たとえそれが全世界のどこでの事に對しても、息子に対する親の責任感のようなものを持つてもらわねば困るし、世界中から軽べつ

の目をもって見られるような日本人が、どんなインターナショナル的なことをいっても、人々の心にうたえたるものは少ない。私は最近日本人意識が世界平和と逆行するとは考えない。むしろ世界中の人々から敬愛されるような日本人になること、そういう人格を身につけて行くことが世界平和にいちばん貢献することになると考えるものです。三人の日本青年によって行われたロッド空港の蜜行は、いかに理屈づけようとも正常な人間の行為として絶対に許せるものではない。あんな事を一般民衆は絶対に支持しないし、民衆の支持を得られない革命など成功するはずがなく、民衆の支持を得られない一部独善者が暴力、権力によって治める社会に平和で幸せな人間生活などあるはずがない。

あのロッド空港事件の直接の加害者が三人の日本青年であった事に対して制作部のZ Y Xの三氏は、その事をさほど重大視していない。「ぼく個人に限れば日本人であったことは、関心を持つきっかけになつてゐる」とまったく他人事のような放言のY氏。そのどれをとらえてみても何かが欠けている。日本人としてこの事件を真剣に考えねばならないんじゃないかと私には感じられる。

ロッド空港の無差別テロの蜜行は日本人青年であり、日本の社会構造、伝統そして教育とに全く日本があつた青年たちを育てたのであり、その事を日本人である我々が重大視せずして一体だれがこのよ様な日本の問題を考えるのだろうか。少なくとも日本の問題は我々日本人の力で解決する、自覚と責任感を持たなければならぬのではないか。何も日本人としてのワクにとじこもれというのではない。現在我々は世界のどこに行こうとも、やはり日本人なのだということ。ユダヤ人でもアラブ人でもない、やはり日本人であり周囲の人

らして貰い協会責任者である私自身が心からおわびし、反省させられております。勿論月刊キブツの編集態度も改めますし、この機会にキブツ研修生の選考方針なども態度を曖昧にせず、親イスラエル即キブツ研修生ということに改めて行きたいと考えております。

この文章を書いている最中に、またまたこともあろうに、世界平和の一大祭典、ミュンヘンオリンピック会場における大不祥事件の勃発である。今後の成行き如何も心痛に耐えないが、最早早なる中東紛争ではなく、世界人類全体の問題として早急に考えなければならぬと痛感します。中東紛争をイスラエル対アラブの問題として高見の見物人的な列国の態度も再考を要する問題であろう。アラブ難民問題の解決も世界的視野で対策を考えなければならぬ時期であろう。元々イスラエル一國で片づく問題でなく、またそんな単一的な問題でもない。だがなんとか根本的な打開策を世界中の良識で片付けなければ、世界の平和も保てない時期にきていると思う。

人質になったイスラエル青年選手全員死亡という悲報をテレビ放送で聴きながら、涙で顔をぬらして本文を書いているが、憎悪が憎悪を重ねて、憎しみ合つて得るものは犠牲だけ、ミュンヘンオリンピックという世界の祭典を汚した悲しい事件を機会に、根本的な和解平和策を確立して貰いたい。

最後にイスラエル大使館から得た資料によりデルヤシン村事件の真相を下記に掲載します。読者諸君の参考にして下さい。

デルヤシン

毎年四月、新しいパンフレットを出し集會を催して、アラブは「

々も私を日本人だと見ている。

そういう中で日本人としての自覚と責任感をもっていなければ、どういふことになるであろうかと。日本の問題、日本人の問題を日本人である自分が痛切に感じないで、やれパレスチナ問題がどうのこうのといつてみても当地の人々にとっては、よけいなお世話だといふ事になるのがオチである。

我々がキブツ研修生をイスラエルに送っているのは、パレスチナ問題解決のためではない。あくまでキブツ社会の研修にあり、パレスチナ問題に口をはさむために来たのではない。勿論パレスチナの問題は関心を持たずにはおれないことだが、我々がアラブゲリラを支持することもいけないし、イスラエルの占領政策を支持することもいけない。そういう事がパレスチナ問題解決になんの役にもたつものではない。現地でパレスチナ問題を具体的に研究し、それを世界の世論に発展させて行くことは、一つの効果が考えられるが、今我々がこの事に対して、生はんかな手出し口出しは絶対に謹むべきであると思う。

キブツ研修生を送る事は、イスラエルにコミットするという考え方も成り立つが、それはキブツがイスラエルにあるため仕方ない事で、それにしてもキブツでの労働、一日六時間一週六日というのは、キブツやイスラエルを助けるためのものでなく自分たちの生活を支えるための労働なのである。それがキブツに与えずぎになると思うなら労働時間の短縮を交渉すればよい。今の労働条件は自分の生活維持のために働く必要があると思う。私見ご批判下さい」

以上は奥村久雄君の書状だが、協会への抗議または批判とも受取

九四八年パレスチナにおけるユダヤ人による無防備のアラブ市民殺害」と称してデルヤシンを取り上げ、イスラエル、ユダヤ人、シオニストに対する悪意ある中傷を指して虚構宣伝を繰り返している。それは年々エスカレートするばかりである。デルヤシンで実際に起つたのはアラブの宣伝とは全く異つた次の様な事であつた。

デルヤシンの戦いは、エルサレム攻防戦の一端である。イスラエル独立戦争は一九四七年十一月三十日、国連がパレスチナ分割を決議した日に始つた。パレスチナアラブ人、アラブ連盟、アラブ諸国はこの国連決議実施阻止の為、攻撃を開始したのである。一九四八年五月十五日にアラブ諸国正規軍が攻撃を開始した際にアラブ連盟事務総長バンヤは、「この戦いは蒙古の大虐殺、十字軍に匹敵する民族壊滅の戦いとなるであろう」と宣言している。これは単なる思いつきの言葉ではなく、アラブの真の意図であり、この意図は今日に至るまで変わっていない。

当時、エルサレムの十五万ユダヤ住民に対して種々な形の攻撃が加えられた。最前線では英軍指揮下のヨルダン軍がユダヤ人口の四分の三が居住するユダヤ地区を大砲、装甲車をもって攻めたて激しい市街戦が繰りひろげられた。

ヨルダン軍はエルサレムとテルアビブ、その他の地域を結ぶ唯一の幹線道路の遮断を企て、水道を遮断した。パレスチナアラブ軍分遣隊はイラク正規軍の応援のもとにエルサレムからの道路を見下す戦略的要所を手中にした。デルヤシンはカステル丘にあるカステル村と並んでこうした戦略的要所の一つであつた。この丘をめぐる争奪の激戦でデルヤシンからカステルへの道は分遣隊の通路となつた。この二つの村は軍事的に関連したものである。

ハガナ（ユダヤ軍団）は激戦の末、丘の要塞部を手中に収めた。デルヤシンは要塞化されていたが、ここをエルサレム戦の一端をになつたイルグンが攻略することを決意した。イルグンはこの目的の為に百人の分遣隊を組織した。

当時、イスラエル国家は存在せず、従つてユダヤ人は正規の軍隊も司令部もたなかつた。装備は非常に粗末であり、通信設備は皆無に等しかった。デルヤシンを攻めたイルグン分隊はこの点、典型的といえる。彼等の手中にあつた武器の最大のもはブレン軽機関銃であつた。隊員の中には戦闘経験の全く無い者もいた。医薬品といへば一人当り二錠のサルファ剤があるだけの状態であつた。

スピーカを積んだ小型トラックがこの分遣隊に同道した。一九四八年四月十日夜明けに村の入口に到着した。分隊は村民に対してスピーカーを通じて攻撃が開始されるので民間人、非戦闘員は村を退去するよう呼びかけを行つた。退去する者達の通行の安全を保障する。但し、警告を無視して村に止どまる者の身の安全は本人の責任であることと呼びかけ警告した。その結果、二百人程の村民が呼びかけに応じて村を出て、丘の低い部分に避難した。この人達は後に無事にエルサレムのアラブ人地区に移され、自由にされた。

デルヤシンの実際の戦闘は、アラブの典型的、そして常套手段である詭計で口火を切つた。即ち、パレスチナ人、イラク人の守備隊は村の家々に白旗を掲げた。しかしイルグン分遣隊の先発隊が村の入口にさしかかると家の内部から一斉射撃が始まり、先発隊隊長が真先きに射られた。激しい近距離射撃戦が続いた。イルグンは途中で弾薬が無くなり陥落した家屋内で見つけた武器で戦いを続けた。ほとんどの建物は、イルグンが怒より手榴弾を投げ込む戦いの

隊長は一命をとりとめた。この言葉は一九五五年四月九日付のヨルダンの日刊紙「アルウルダン」に載つたものである。

攻撃を加えたイルグンが奇襲攻撃をせず、更に、避けられたであろう味方の人的損害の危険を冒して攻撃開始命令を出す前に、村の住民に避難の警告を発した事実は、アラブ連盟事務局が発行した「イスラエルの侵略」と題するパンフレットの中に明確に記載されている。その十頁目に次の様な文章がある。「一九四八年四月九日夜、エルサレム郊外の平和なアラブ村デルヤシンは、直ちに村を立ち去るよう住民に呼びかけるラウドスピーカーの声に驚かされた。」

ユダヤ人当局―その当時はユダヤ機関とハガナであるが―はデルヤシンの戦いで多数の民間人が犠牲になつたことに深い心痛を表明した。アラブの意図的、そして事前に計算された民間人殺害について遺憾の意の一言さえも発した事のないアラブ側は、このユダヤ機関とハガナの悲しみの表現を「罪」の「証拠」であると解釈、曲解するのによつてきた。ユダヤ機関とハガナはそのメンバーはデルヤシンの戦闘に参加しておらず、故に直接現場を目撃したのではないので、事実関係を認めたり、又否定したりする立場になつたのである。事件の基本的諸事実は明白であり、議論の余地のないものである。デルヤシンは要塞化され、防備をかためた陣地として戦いの場になつたのである。村民は戦闘開始前に退去する充分な機会を与えられていたであり、村に残つた人々が殺されたのは不可避であり、非戦闘員が故意に狙い撃ちされたとは全く異なる。

アラブ側の「嘘」は、要塞と化し、防備をかためられた村を攻撃する場合、村民が騙され残っていて戦闘にまき込まれ傷ついてしまふという場合の攻撃側の兵士が直面する問題を全く無視している。

末、手中に落とした。戦闘の終り近くになると、デルヤシンの守備隊員達は婦人服を身に覆い逃亡を画で、攻撃隊員に直面するとわかに発砲した。婦人服の下はれつきとしたイラク正規軍の制服を着、武装したイラクの軍人であつたりした。

戦闘終了時、イルグン隊側は四一名の死傷者を数えた。戦闘が終つた時に占領した家々の中でイルグン隊が目撃したのは真に恐るべき光景であつた。パレスチナ人、イラク人戦闘員に入り混つて無惨にも多くの婦女子の死体を見出したのである。これ等犠牲者達は、退去の警告にもかかわらず、守備隊を信じて残つたのであろうか、無事に退去した村人達と共に避難することを妨げられたのか、又はそうすることを恐れて踏みとどまつたのであろうか。理由はなんであれ、彼等は残酷な戦争の罪なき犠牲者であり、その責任は村での戦闘が開始されるずっと以前に彼等がこのデルヤシ村を要塞とすると同時に村民を事前に立ちのかせる義務を、同様の事情下のどの場合でも軍人の義務を果さなかつたアラブ兵士達に全面的にある。兵士、民間人合わせてこの戦いでのアラブ死者の合計は二百名をえた。イルグン分遣隊は限られた手元の医薬品を使い、同胞のそして村民の負傷者を手当てしエルサレムの病院に運んだ。

難をまぬがれたデルヤシンの有力な村民、ニネスアハラム・アサドは次の様に述べている。「ユダヤ人達は村民を傷つける意図は決してもつていたのではない。彼等は村民の中からの発砲に直面し、その隊長を射殺され、結果として村民を傷つけてしまふような行動に出るはめに追いやられたのである。」この声明の中で唯一の誤りは、イルグンの隊長が死亡したとされている点である。彼は隊長が弾に当り倒れるのを目撃して死亡したと思つたのであろう。実際にはこの

二百人の村民が戦闘の前に警告に応じて避難し、村を離れた後、まだ村民が村の中に残っているかどうかを知る方法は無かつたとイルグンは主張している。明確な事は、アラブ側の宣伝がいつている様な無防備の平和な村民が武装部隊の手によつて虐殺されたというのは全く事実無根であるということである。イルグンは戦争をし勝つたというだけの事であり、戦闘の後で、イルグンの手によつて無法行為や残酷な行き過ぎ行為は全く行われていないのである。

デルヤシンのことについてのアラブ側のでっち上げ宣伝の典型的例は「ダマスカス・パレスチナアラブ難民事務所」と称する組織が、一九五八年に出した「パレスチナクエスチョン」という名のパンフレットである。その九二頁には次の様に述べられている。「四月十日、エルサレム郊外のアラブ村デルヤシンはシオニスト達の攻撃を受けた。村中を略奪してまわつた後で、非情な攻撃者共はその目を人間戦利品へと向け、情容赦なく、男、女子供を殺害した……」

イスラエル及び一九四八年の戦争を戦つたイスラエル建国の父達を知っている人ならば唯一人、こうしたアラブの悪意に充ちた作為の宣伝を受け入れないであろう。デルヤシンに関するアラブプロパガンダの記述は、アラブがユダヤ人に対して行つて来ている虐殺の数々の事実をそのままではめ写し出しているのである。一九二九年のフルダとヘブロンでのユダヤ人大虐殺に始まり、一九三六年から三九年の期間、一九四七年から四八年にかけて、そして一九四九年から今日に至るまでのテロ行為等、アラブの対ユダヤ人虐殺事件は数限り無い。最近の例として、イラクのバクダットで、スパイと称してユダヤ人を公開処刑し遺体をそのまま公衆の面前にさらすという事件があつた。